「老練」に傾く時代

朝日新聞の政治記者だった早野透氏が昨秋出版した「田中角栄」（中公新書）は、いまだに人気が衰えない元首相の不思議な存在感と引力、哀歓を濃密に描いているが、所々出てくる同時代の「老政治家」についてのエピソードも興味深い。

「西村じいちゃん」と言われた西村英一元自民党副総裁。一九七九年の八十二歳の時、派閥が争った「四十日抗争」の調整役として汗を流した人物だ。

清廉で、木造の古い家に住み続けた西村氏が角栄氏に「総理が札びらを切るなんてみっともない」と直言すると、角栄氏は「じいさん、あんたには学歴もある。高級官僚だった自尊心もある。だが、俺には何もない。しがない馬喰のせがれにはこれしかないんだ」と涙を流したという。

西村氏は疑獄にまみれた角栄氏を最後まで見捨てなかった。早野氏は西村氏について「朴訥にしてユーモラスな人柄に、夏目漱石の『坊ちゃん』や『三四郎』に描かれる明治の明るい青年はこんな感じかなと思った」と記している。

椎名悦三郎元自民党副総裁が、角栄氏の後に三木武夫元首相を指名する「椎名裁定」を行ったのは七十六歳の時。「おとぼけの椎名」と言われた国会での答弁ぶりがよく知られる。

日韓交渉で韓国に「深く反省する」と述べた意味を問われると、椎名氏は「しんみりと反省しているということです」と味のある答え方をした。日米安保条約に反対する社会党に追及されて「アメリカは日本の番犬である」と答弁。野党の方があわてて「大臣、そんな答えでいいのか」と問い直すと、椎名氏は「あ、間違えました」と一拍おいて「番犬さまでございます」と答えたという。早野氏は「人を食った答弁は椎名の落語好きから来ているものらしかった」と触れている。

落語で「枯れた芸」というのは褒め言葉だが、政治の世界にも年輪を重ねなければ生まれない雰囲気や話術がある。こうした熟練の力がどの時代にも物事を決める際の潤滑油として求められてきた。

道内政界でも最近、ベテランをめぐる二つの話題が熱を帯びた。一つは、民主党道連の代表に横路孝弘前衆院議長（七二）が選ばれたこと。もう一つは、国会議員、道議らによる投票に持ち込まれる異例の選考経過をたどった自民党の参院選道選挙区候補に、現職の伊達忠一氏（七四）が選ばれたことだ。

民主党は昨年の衆院選で衆院議員が大量に落選し、横路氏以外に選択肢がなかったという事情がある。自民党の候補選びも、道議が四人も手を挙げ、伊達氏は過半数を確保できなかった。政党が積極的に「ベテランの力に期待した」という読みは短絡的すぎるだろう。

ただ、それでも、政治のバイオリズムの周期が「老練」「熟達」「安定」の方に振れていると感じるのは気のせいだろうか。

若さと清新さ、しがらみのなさを売りにした民主党政権が挫折した影響も大きいに違いない。若さとは「経験不足」「稚拙」「不安定」の裏返しとの印象が強く残った。

老齢ではないが、首相経験者である安倍晋三氏（五八）が、経済政策を中心とした無難な政権運営に努める。景気が上向く「現世利益」に反応した有権者は、久々に安定した政治を好感している。戦後日本を半世紀以上引っ張ってきた自民党の経験に対する安心感。その心を、鳩山由紀夫元首相は朝日新聞紙上で「巨人、大鵬、卵焼き、そして自民党なんですよね」と答えている。

一方で若手の代表格だった橋下徹大阪市長（四三）は、ベテランの石原慎太郎・日本維新の会共同代表（八〇）にすり寄ったとみられて評判を落とした。一時は首相候補とも言われた民主党の細野豪志幹事長（四一）は、難しい党内事情を抱え「我慢」「自重」といった雰囲気が表情からもにじみ出ている。自分の中の若さを諌め、老成を演出しているかのようだ。

老練を求める空気は、歴史のバランス感覚なのだろう。小泉政権、民主党政権と続いた変革の波に対する「改革疲れ」という言葉も耳にした。しかし、政治のバイオリズムは、いずれまた「挑戦」の周期に入る。老と青の古くて新しい戦い。志を秘めた若手は、今が力を蓄える時だ。

＜由＞